

Application for Participation (日本語版)

Associated Schools Project (ASP) for Promoting International Education

Outline of the way the Project(s) will be implemented in the institution

(please use extra sheets if necessary)

I Description of the Project (プロジェクトの概説)

1. 大垣養老高校の特色と取り組むESDの教育活動の概要

(1) 大垣養老高校をとりまく地域と歴史について

岐阜県立大垣養老高等学校（以下「大垣養老高校と表記」）は岐阜県西濃地域の養老町に位置する唯一の高等学校である。学校周辺は豊かな自然環境と地域資源に恵まれており、全国的にも有名な「養老の滝」がある。また、地域産業も活発で、西濃（大垣市）には大企業の本社もあり、県内を代表する企業も数多く、自然豊かな魅力ある産業地域である。

大垣養老高校は2005年4月に大垣農業高校と養老女子商業高校が統合してできた学校である。大垣農業高校は、大正10年に安八郡立農学校として創立した西濃唯一の農業高校である。また、養老女子商業高校は、昭和23年に学校組合立高田女子高校として開校し、女子を対象とした商業教育に力を入れてきた学校である。

この両校の良さを生かして、「時代に対応した地域社会に役立つ人づくりを目指す学校」として、大垣養老高校は開校した。安八郡立農学校から数えると94年目で、卒業生は2万2千人、地域産業に貢献してきた歴史と伝統を引き継ぐ学校である。

(2) 大垣養老高校の特色

本校には大学科として、「総合学科」と「農業科」の2学科があり、総合学科には、ビジネス・会計・情報・生活福祉・大地の恵みの5系列（9クラス）、農業科では、生産科学科、食品科学科、環境園芸科の3学科（9クラス）がある。現在は1学年6クラスで全校生徒数720名の中規模校である。在籍生徒の出身は、大垣市が40%、養老郡が20%、不破郡12%、海津市・安八郡、揖斐郡各9%で西濃全域から生徒が集まっている、まさに地域の学校と言える。

「質実剛健・自主創造」の校訓のもと、本校の「教育目標」は、「生徒の将来の自己実現と幸せな人生を願い、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かで、自立と共生をもって地域に生きる有為な人材を育成する。」である。本校はこれまで、「総合的な学習の時間」や「課題研究」の時間を中心に、西濃地域が持つ豊富な地域資源・財産の発見と活用、地域との連携を深め、地域を支える生徒の育成と学校づくりに取り組んできた。

ユネスコスクールとしては、それらをさらに発展させ、一人ひとりの生徒に持続可能な社会の担い手に必要な知識、能力、態度、価値観を身につけさせることを目的とし実践する。

特に、これからの社会を生き抜く力を身につけるため、国際的な視野を養うための「国際理解教育」プロジェクト、「地域連携・環境教育」プロジェクト、「人権・福祉・ボランティア教育」プロジェクトを「総合的な学習の時間」、「課題研究」の時間を中心に他教科

と関連付けながら全校で実施する。そして西濃地域におけるE S Dの拠点校として地域社会の持続発展に貢献していく。

2. ユネスコスクールにふさわしいと考えられるこれまでの取組

本校はこれまで、地域からの期待が大変大きな学校として、地域貢献を重視する教育を行ってきた。これまでのさまざまな取組の中で、「国際理解教育」・「地域連携・環境教育」・「人権・福祉・ボランティア教育」の視点から、ユネスコスクールにふさわしいと考えられる活動実績を以下に示す。

(1) 「国際理解教育」

これまで希望生徒に対してシンガポール・マレーシアでの研修を実施し校内で報告会を開き、その成果を全校生徒に還元してきた。県教育委員会主催の岐阜県農業高校生海外実習派遣事業では、県内の農業学科で学習する生徒の代表をブラジル・オランダに派遣し、農業の体験的な研修を実施し、広い視野に立って将来経営ができる農業産業人の育成につなげている。また、大垣市ユネスコ協会が主催するグローバルイシューワークショップに代表生徒を参加させ、ユネスコ協会の方々や海外留学生の方との交流も深めてきた。その他、地元養老町では友好都市ドイツ・バットゾーデン市と隔年で交互訪問を続けており、スポーツ交流では、本校でなぎなたや弓道や剣道の見学および体験をしてもらい友好親善の関係を深めてきた。

(2) 「地域連携・環境教育」

企業連携による商品開発・販売実習に取り組んできた。特に地域の魅力を発見・活用して地元企業と連携し、アンテナショップや道の駅、高速道路サービスエリア等での販売実習を行ってきた。地域や企業と共同での商品開発にも取り組んでおり、実践を通して農業や商業・情報に必要な知識や技術を実践的に身に付けている。

本校は県教育委員会の専門高校生地域連携推進事業やI N P I Tの知的財産に関する創造力・実践力・活用力開発事業の展開型の指定を受けている。いずれも知的財産に関する研究で、農業科と総合学科が協力して産・学・官一体となった取組を推進してきた。

例えば、食品科学科では、「バイコム」という名の模擬企業を立ち上げ、南濃ミカンの天然酵母を利用したパンづくりを継続して行ってきた。また、池田町の米粉と抹茶を加え焼き上げたパンは池田町の給食に導入され、生徒が小学校に出かけPRをした。さらにコンビニとのコラボパンは、地元の人に広く認知された名物パンとなった。この活動が評価され活動内容を中学生の前で発表する機会も得た。

養老町には、滝の水が酒になり、それを飲んだ老人が若返ったという孝子伝説で有名な「養老の滝」がある。その養老の滝伝説を再現するプロジェクトに取り組み、日本水産学会で未来開拓賞、成美大学主催の田舎力甲子園で入賞、コカコーラ環境教育賞で優秀賞を獲得したり、J A主催笑顔プロジェクト中日本大会にも出場した。また、東京理科大学の科学論文コンクールで優秀5編の一つに選ばれた。さらに、中部の未来創造大賞で優秀賞と中日新聞社賞も受賞した。関ヶ原町のヤギ乳を使ったパンや養老町の酒屋の酒粕を利用したパンの試食会を町役場で行い、新聞にもよく紹介された。環境に関する論文では、毎日農業記録賞優良賞や鳥取環境大学の環境論文コンクールに入賞した実績もある。

また、環境園芸科では、国営木曾三川公園や福祉施設のなどの花壇作り、地域住民と協働しての養老町宮ノ森公園での剪定活動、東海自然歩道の山道整備などを行ってきた。特に、

その成果は、国土交通省中部地方整備局に認められ、国営公園の保全・美化の推進に多大な貢献をした功績で感謝状をいただいている。

(3) 「人権・福祉・ボランティア教育」

学校全体では、人権講話や人権LHRおよびMSリーダーズ活動を実施している。総合学科生活福祉系列では、福祉やボランティアについて専門的・実践的に学んできた。特に、人権教育では、長年にわたり学校全体として取り組んだ成果が認められ、県教育委員会より「ひびきあい賞」の表彰を受けている。

以上のように、「国際交流活動」「地域の魅力と課題の発見」、「地域の方々との交流活動」、「環境教育」、「福祉教育」、「ボランティア活動」、等をとおして活発に活動してきた学校であると言える。

II Objectives of the Project (プロジェクトの目的)

1. ユネスコスクールとしての教育重点と価値観や能力

本校はこれまでに地域に根ざした「持続可能な開発のための教育」の取組を推進し、地域に生きる有為な人材を育成してきた。今後、ユネスコスクールとしての教育の重点を次のとおりとする。

- ①他者を尊重し、生命を大切にする教育を実践し、規範意識や品位を備えた心豊かな生徒を育てる。
- ②日々の授業を大切にし、確かな学力が身に付くように努め、高い「志」を持って意欲的に取り組む生徒を育てる。
- ③「地域連携」に加え「国際理解教育」を推進することにより、グローバルな視野で考え地域目線で行動できる生徒を育てる。
- ④部活動、生徒会活動、農業クラブ活動、家庭クラブ活動など生徒が主体となる活動を重視し、活力ある学校作りに努める。

2. プロジェクトの目的

(1) グローカル化

昨年度、策定された岐阜県第二次教育ビジョンでは、岐阜の理想の人間像を「高い志とグローバルな視野をもって夢に挑戦し、地域社会の一員として考え行動できる地域社会人」としている。本校では、先に述べたように地域連携や地域貢献の取組は、これまで十分に行っており、今後は「高い志とグローバルな視野」を身に付けることが求められていると考える。このような中で、本校では、「グローカル化」という言葉を新たな指針として掲げた。グローカル化とはグローバル（地球規模の、世界規模の）とローカル（地方の、地域的な）を掛け合わせた造語で、「地球規模の視野で考え、地域目線で行動する」という考え方である。地球規模の視野を持つためには、環境問題を初め、文化、人権など、すべての分野において、持続可能な関係を目指し、人類が抱えている困難な問題に立ち向かっていくスキルが必要といえる。そのために、ユネスコスクールへの加盟をとおして海外の学校と交流し、ESDの視点を取り入れた教育を推進していきたい。特に今後はさらに、「国際的な視野を養う」とともに「国際的な視野を広げる活動」を充実して、ESDの視点を取り入れた教育を活発化させ、これまで取り組んできた内容をさらに深める。

(2) 総合学科・農業科におけるESDの目的と生徒像や資質

総合学科では、「キャリア教育を通して、自己実現に向け、自ら学び自ら考え選択できる能力を高め、自己責任のとれる生徒を育成する」ために、一人一人の能力・適性に応じた教育を通して、生徒が主体的に学習し確かな学力を身に付け、自己実現に向けて努力する資質を育成する。また、進路選択を確かなものにするため、科目選択についてのガイダンス・カウンセリングおよびキャリア教育の充実を図る。さらに、ESD視点での地域連携やボランティア活動等を通して、人とのふれあいや思いやりを大切にする豊かな人間性を育み、総合学科の魅力、生徒のESDにおける学習活動などを、地域や中学生に発信しPRに努める。

農業科では、「持続可能な循環型社会に向けて環境・農業教育を推進し、地域の先進的なエコロジカル・アグリハイスクール」の取り組みを深める。生徒に経営能力や奉仕精神を身に付けさせ、基本的な農業技術能力と応用力を持った地域社会人を育成するために、安全・安心な農業生産への取り組みをはじめ、環境に優しい農業分野への課題研究を通して環境教育を推進する。また、幼、小児童などの受入・交流を通して、心の教育・いのちの教育・食農教育を推進する。地域農業者との連携地域技術交流体制づくりも行い、地域連携・地域共生・地域貢献を深め地域に根ざした教育を推進し、生徒の実践的な能力や態度を育てる。

III Execution (プロジェクトの実施)

(e.g. through a specially designed course, through an existing course(s) or as an extracurricular activity)

1. 「国際理解教育」プロジェクト

地球規模の視野で考え、地域目線で行動できる地域社会人を育成する。そのために、海外に興味関心を持たせるとともに、グローバルな視野とコミュニケーション能力を身に付けさせる学習に取り組む。また、海外体験研修を実施し、国際感覚を身に付けさせ、将来のグローバル（アグリ&ビジネス）リーダーを育成する。具体的には、マレーシアの大規模プランテーション農場を見学することで、日本とは異なる農業の在り方を学んだり、現地で生産されている農作物が日本やその他の国に輸出されていることを知ることにより、世界のつながりを知る。また、シンガポールでは食品などの日系企業を見学し、海外に拠点を置くことの意義や海外で働く上で大切なことを学び、グローバルな視野を身に付けさせる。さらには、語学力を生かし、海外の大学生や高校生と交流することで、コミュニケーション能力を養い、異文化を体験することで、相手を思いやる心を育むとともに、日本の文化を再認識させる。太平洋戦争の爪痕が残る場所を訪問し、平和の尊さを実感するとともに、国際人として世界平和に貢献できる気質を養う。そして、帰国後は本校、地域のリーダーとして活躍できる生徒の育成を目指す。

その他、全校生徒に対しては、大学の外国語学部との高大連携により、国際社会を生きる若者のあり方について学ぶとともに実用英会話を身に付けさせたり、JICAの講演などを通して、異文化理解や国際ボランティアの必要性を学び、国際理解教育を推進し、グローバルな視野で行動できる生徒を育てる。

(1) シンガポール・マレーシア研修の実施

(全学年対象、希望者、学校行事、12月下旬、6泊7日)

現地の学校訪問やB&Gプログラムにより大学生との交流を行う。また、現地企業や農村の見学の他、平和学習、体験学習なども取り入れて実施する。

(2) 事前研修会の実施（全学年対象、希望者、5時間程度、放課後の時間を活用）

シンガポール・マレーシア研修の事前研修として英語科の先生に協力をしてもらい校内研修を実施する。

(3) 講演会やHR活動の実施（全学年対象、学校行事、HR活動、4時間程度）

海外事情を深めるためのHRで話し合いや、外部団体（JICA国際協力出前講座など）を招き学年対象として実施して、発展途上国の文化や生活を学ぶ学習を行う。また、大学の外国語学部との高大連携を進め国際理解教育に関する講演会などを開いて、海外に興味・関心を持ち、海外で学ぶことや英語を学ぶことの意義を考えさせる。

2. 「地域連携・環境教育」プロジェクト

(1) 総合学科の地域の魅力発見・発信学習（3年、年間、課題研究、商品開発など）

総合学科では、商業に関する学習を深め、地産地消を目指し地域と連携して商品開発を行う。また、地元養老町では2017年に開催される「養老改元1300年祭」に向けて活動をしているが、この活動を支援するために「フリーペーパー」作成の学習を実施する。フリーペーパーは、無料の情報誌を使って地元養老や大垣の魅力を、生徒が取材しその魅力を情報発信することで、地域の魅力を多くの方に知ってもらう学習活動である。

(2) 農業科における地域連携・環境教育プロジェクト（3年、年間、課題研究、総合実習）

農業科における地域連携・環境プロジェクトの具体例としては、次のような取り組みが考えられる。

①お布団農法プロジェクト

布マルチシートを利用した直まき栽培の研究に取り組み、労力の削減や有機無農薬米栽培に取り組む。

②ジビエプロジェクト

ジビエ（野生鳥獣の食肉）の普及や商品開発を目指して、地元の解体処理業者や大学などと産官学で共同研究をする。ジビエ料理を産業として発展させ、農作物などへの鳥獣被害を少しでも減らす狙いで実施する。商品開発のほかに、料理教室や料理コンテストの企画、イベントへの出店なども検討し学習を発展させる。

③環境と調和した優しい環境創出プロジェクト（河川敷の有効活用）

本校の作物と養牛部門で連携し、発酵させた完熟堆肥を水田に散布し、化学肥料の依存度を低減し過剰施肥による土壌負荷を軽減させる。また、サイレージを採草地と牧田川河川敷で栽培し、環境と調和した優しい循環型の農業を実践する。

④湧く湧くプロジェクト（養老孝子伝説再現プロジェクト）

水が酒にかわったという「養老孝子伝説」にちなみ、養老公園の菊水泉でくんだ水を使って、酒をはじめさまざまな酵母食品の製造・開発に取り組む。湧水の菊水泉から取り出したアルコール発酵微生物を「菊水酵母」と名付け、「菊水酵母」を使ったパンの開発や大学と協力して「菊水酵母」による日本酒製造試験を行う。酵母菌の分離や地域の特産品となる加工品を商品化し地元を活性化させ、河川環境や水質調査を地元の小中学生と一緒に、次の時代の環境保全の意識付けを行う。

⑤「みんなで笑顔プロジェクト」

日本名水百選にも選ばれている地元養老町の菊水泉の湧水を使い、木おけで昔ながらのしょうゆづくりを実践する。しょうゆの原料となる大豆や小麦は県産を使用し、地元産食材にこだわる。また、県産小麦を使った天然酵母パンや菊水泉しょうゆの商品化を目指し

て学習する。

⑥ひょうたんサークル秀吉プロジェクト

養老町のシンボルであるひょうたん栽培に取り組む。ひょうたんを活用したイルミネーション装飾の製作や食用ひょうたんの栽培・加工に取り組み、まちおこしをすることを目的に実施する。

⑦環境改善プロジェクト

国営木曾三川公園や福祉施設のなどの花壇作り、地域住民と協働しての養老町宮ノ森公園での剪定活動、東海自然歩道の山道整備などを行い、環境改善に関するプロジェクトを実施する。

3. 「人権・福祉・ボランティア教育」プロジェクト

学校全体では、人権講話や人権LHRおよびMSリーダーズ活動などを通じて、人権感覚を高める活動に力を入れて実施する。また、総合学科の生活福祉系列では、カリキュラムに「社会福祉基礎」、「コミュニケーション技術」、「生活支援技術」を取り入れて、合計8単位で計画的・系統的・横断的・実践的に学ぶ。

(1) 人権講話・人権LHR学習（全学年、12月、2時間、特別活動、学級活動）

外部講師による講演会を開催し、世界に生きるさまざまな人の姿を通して、自らの生き方・在り方を見つめ直すとともに人権感覚を磨き、国際理解について学ぶ。また、人権問題について、各学級で話し合う。この活動は、「あたたかい言葉かけ運動」などを通して言語活動の充実を図り、国語と関連させて実施する。

(2) 福祉理解学習（総合学科・生活福祉系列、6月～1月、76時間、福祉科目）

特別養護老人ホームで、介護福祉士や相談員らを招き、福祉施設でシーツ交換やレクリエーションなど、福祉に関する実践的な知識や実技について学ぶ。また、大学より講師を招き「手話」や認知症サポーター養成講座へ参加するなどして「福祉の心」を深める。

(3) ボランティア学習

①生活福祉ボランティア学習（総合学科・福祉系列、7～10月、40時間、福祉科目）

福祉施設の夏祭りの手伝い、福祉作業所のふれあい祭などをおして、社会に求められる高い資質と思いやりをはぐくむ学習を実施する。さらに、国際青少年赤十字活動に参加して「ボランティアスピリット」を高める。

②MSリーダーズにおけるボランティア学習（希望生徒、年間、16時間、特別活動）

マナーズ・スピリット・リーダーズの略語で、高校生の規範意識を高めるために、交通安全の呼びかけや清掃活動、挨拶運動などの啓発活動を行い、地域社会の健全育成に貢献する。

IV Type of materials to be used（使用する教材）

ESDのテーマ毎に、地域の教育資源の活用や外部教育力を生かした行事や学科の枠を超えた内部教育力を生かした取組を実施し活用するなど、教育目標実現のために最も適した教材を準備する。

1. 教具・教材

(1) パソコン、プロジェクター、デジタルカメラ、付箋などの学習教材。

(2) ハツシモ、河川敷のイタリアンライグラス、ひょうたん、養老の滝、菊水泉、揖斐茶、南濃ミカン、カーネーション、シクラメンなどの地域資源学習教材。

- (3) シンガポールやマレーシア研修での現地大学生との交流、MSリーダーズにおける地域住民との交流活動などの人的交流財産学習教材。

2. 書籍

- (1) 「地理A」：東書
- (2) 「高等学校新規現代社会」：帝国
- (3) 「地歴高等地図—現代世界とその歴史的背景—」帝国
- (4) 「最新社会と情報」：実教、「農業情報処理」：実教
- (5) 「農業と環境」：農文協
- (6) 「生活福祉基礎」、「生活支援技術」、「コミュニケーション技術」：実教
- (7) 「産業社会と人間 三訂版 よりよき高校生活のために」：学事出版
- (8) 「産業財産権標準テキスト 総合編」：独立行政法人工業所有権情報・研修館 2012

3. ウェブサイト

- (1) ユネスコスクール公式ウェブサイト <http://www.unesco-school.jp/>
- (2) 日本各地のユネスコ協会 <http://www.unesco.or.jp/unesco/local/>
- (3) 独立行政法人 国際協力機構 <http://www.jica.go.jp/>
- (4) 養老町のHP <http://www.town.yoro.gifu.jp/>
- (5) 大垣養老高校のHP <http://school.gifu-net.ed.jp/oyourou-hs/> (情報の発信)

V Is there any type of evaluation to examine the effects of the project on students' comprehension and attitudes? (プロジェクトに対する生徒の理解と姿勢の評価方法)

プロジェクトに対する生徒の理解と姿勢を次の観点と方法で評価する。

1 評価の観点

- (1) 関心・意欲・・・国際理解や地域連携・環境問題、人権・福祉・ボランティアなどの問題について関心をもち、その改善を目指して考えようとしたり、調べようとするなど意欲的に取り組む実践的な態度を身に付けている。
- (2) スキル・・・学んだ知識や情報を多面的に分析・考察して基礎的な知識と情報を活用するなどして課題を適切に判断し、合理的に解決する実践的な能力を身に付けている。
- (3) 知識・・・国際理解や地域連携・環境問題、人権・福祉・ボランティアについて、基礎的・基本的な知識を身に付け、ESDに関する基本的な理念と意義を理解している。
- (4) 態度・姿勢・・・困難な課題に対して、主体的に取り組む、よりよく問題を解決しようとする意欲や態度を身に付けている。

2 評価の方法と時期

- (1) 学校評価(教員評価・生徒評価、授業アンケート・授業自己評価の活用)

各教科・科目、特別活動、総合的な学習の時間、課題研究における教師による観察記録、自己評価や相互評価の状況を記した評価プリントや学習記録、レポートや作文・研究のまとめ、制作物、教師や外部講師のコメント、学習の記録や作品などを計画的に集積して総合的に評価を行う。

- (2) 生徒アンケート（5月・10月）、保護者アンケート（7月・12月実施）
生徒には生活アンケートを実施し、保護者は三者懇談時に全保護者を対象にアンケートを通して評価を行う。
- (3) 学校評議員評価（6月・1月実施）
5名の学校評議員による授業見学・農場見学・生徒発表、意見交換を通してE S Dの外部評価を行う。また、P T Aの方々からの学校の評価を指標とする。
- (4) 生徒の活動への参加率
生徒が自主的・意欲的に活動できたか、希望者参加の事業に対し自主的に参加した生徒数の把握を行う。

On behalf of my institution, I apply for participation in the UNESCO Associated Schools Project and give the assurance that this institution will make an active contribution to the Project, as outlined above, for a minimum period of two years. At the end of every year, I shall submit a report of the Project to the ASP National Co-ordinator of my country.

(本学校を代表して、ユネスコASPの参加申請をし、少なくとも2年間は上記概要にそってASPに貢献する活動を行うことを確約します。また、毎年ASPコーディネーター（※日本の場合は日本ユネスコ国内委員会）に活動のレポートを提出します。)

Date (日付)

Principal's name (校長名 (※直筆))

Position, (役職)

Institution's name (学校名)